



宮田賢二 編
 広島県 海陸風
 広島女子大学 地域研究叢書
 III

溪水社出版, 1982年, A 5 判, 395頁,
 4,800円

広島女子大学地域研究叢書は、初めて耳にし目を通した研究報告書である。それが地域研究にいそしみその成果を県民に還元する手段として世に問うものであるとの刊行によせられた学長の一文を読み、題名、執筆者を改めて見なおしたとき、かつてある時期に研究調査に著者等グループと共に手をつけたことを思い出し、それらがどのように書かれているか興味をさそった。

確かに少なくとも広島県では、臨海工業地帯で工業活動が盛んになってきた頃、汚染物質の輸送、滞留に関連した大気汚染の実害が出始めた頃から、海陸風の実態調査のために地方自治体を含めて各関係機関で観測が始められた。それとは別に、“瀬戸の夕なぎ”でも知られた内海沿岸の微風は、沿岸気象官署では古くから地道に調べられていた。

以上のことが本書の中にもれなく記述されており、その意味で広島県沿岸地域の海陸風は網羅されているといっても過言ではない。これらの知識は日本中どこの海陸風にも当てはまるものもあるが、反面瀬戸内海沿岸という特殊地域での独特の現象もあって、その点読者が注意して読まれ、利用されることを希望する。

編者はまえがきの中で、本書発行のねらいについて、この書の中にのせてある海陸風の調査研究は多くの方々と関係機関の協力のもとでなされたもので、それを還元する目的で書きあげたと述べている。事実、本書は現時点では総合的なとりまとめとしてこれ以上のものは見当

たらない。本書は、第2章で出現の判定方法として実態に関する解析を示しており、第3章では地表付近の海陸風出現日のデータに基づき、実態を統計的に解析し現象のばらつきを定量的に調べて、季節的变化の特徴、広域的な性状、交替時刻等を明らかにしている。第4章では海陸風の鉛直構造と広域構造について、女子大グループの実施した各地点での調査をその観測方法およびそれから得られた結論まで詳細に報告し、終わりに他の研究グループによる調査・研究にもふれている。第5章では海陸風の発生と変動の要因について、日射量、気圧配置、温度場等との関係を調べているが、これらは予備解析結果に留めている。第6章は大気汚染との関連性を県内各地区毎にまとめ、汚染物質濃度の日変化を時系列パターンでみて、類似している測定局では汚染機構に共通性があると指適している。第7章では全体的なまとめをし、付録として県下27ヶ所の海陸風日における月別、時刻別、成分別の風速値の一覧表を示しているが、これは今後海陸風を研究する人々にとってはよい資料となるであろう。

本書の庄巻はやはり第4章で、このなかには筆者等グループによって提示された新しいいくつかの事実が詳細に述べられており、瀬戸内海を含む周辺部での特徴的現象を見つけている。ただこれらの新しい注目すべき事実に対しては、今後さらに数値シミュレーション等による研究が進められ、内海沿岸という特殊地形をもつ地域での理論的な海陸風の究明が望まれる。また今後の課題として述べている、統計的性状と観測事実に基づく鉛直構造やその広域構造との整合の問題や、シミュレーションの計算結果と観測結果との比較対応させて、さらに検討を行う等を進められて、いつの日にかさらに発展させた海陸風に関する叢書の発行を期待する。

(根山芳晴)